三位一体後第十四主日礼拝説教

「生涯の日々を正しく数える」

【聖書箇所】詩編９０

【祈り。神の人モーセの詩。】1 主よ、あなたは代々にわたしたちの宿
るところ。 2 山々が生まれる前から／大地が、人の世が、生み出され
る前から／世々とこしえに、あなたは神。3 あなたは人を塵に返し／「人
の子よ、帰れ」と仰せになります。 4 千年といえども御目には／昨日
が今日へと移る夜の一時にすぎません。5 あなたは眠りの中に人を漂わ
せ／朝が来れば、人は草のように移ろいます。6 朝が来れば花を咲かせ、
やがて移ろい／夕べにはしおれ、枯れて行きます。 7 あなたの怒りに
わたしたちは絶え入り／あなたの憤りに恐れます。 8 あなたはわたし
たちの罪を御前に／隠れた罪を御顔の光の中に置かれます。 9 わたし
たちの生涯は御怒りに消え去り／人生はため息のように消えうせま
す。 10 人生の年月は七十年程のものです。健やかな人が八十年を数え
ても／得るところは労苦と災いにすぎません。瞬く間に時は過ぎ、わ
たしたちは飛び去ります。 11 御怒りの力を誰が知りえましょうか。あ
なたを畏れ敬うにつれて／あなたの憤りをも知ることでしょう。12 生
涯の日を正しく数えるように教えてください。知恵ある心を得ること
ができますように。 13 主よ、帰って来てください。いつまで捨てておかれるのですか。あなたの僕らを力づけてください。 14 朝にはあなたの慈しみに満ち足らせ／生涯、喜び歌い、喜び祝わせてください。 15 あなたがわたしたちを苦しめられた日々と／苦難に遭わされた年月を思って／わたしたちに喜びを返してください。16 あなたの僕らが御業を仰ぎ／子らもあなたの威光を仰ぐことができますように。17 わたしたちの神、主の喜びが／わたしたちの上にありますように。わたしたちの手の働きを／わたしたちのために確かなものとし／わたしたちの手の働きを／どうか確かなものにしてください。

ルカによる福音書 2:22～37

22 さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。23 それは主の律法に、「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」と書いてあるからである。 24 また、主の律法に言われているとおりに、山鳩一つがいか、家鳩の雛二羽をいけにえとして献げるためであった。25 そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。26 そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。27 シメオンが“霊”に導かれて神殿の境内に入って来たとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。 28 シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。29「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり／この僕を安らかに去らせてくださいます。30 わたしはこの目であなたの救いを見たからです。31 これは万民のために整えてくださった救いで、32 異邦人を照らす啓示の光、／あなたの民イスラエルの誉れです。」 33 父と母は、幼子についてこのように言われたことに驚いていた。34 シメオンは彼らを祝福し、母親のマリアに言った。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするためにと定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。35――あなた自身も剣で心を刺し貫かれます――多くの人の心にある思いがあらわにされるためです。」

36 また、アシェル族のファヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。非常に年をとっていて、若いとき嫁いでから七年間夫と共に暮らしたが、 37 夫に死に別れ、八十四歳になっていた。彼女は神殿を離れず、断食したり祈ったりして、夜も昼も神に仕えていたが、 38 そのとき、近づいて来て神を賛美し、エルサレムの救いを待ち望んでいる人々皆に幼子のことを話した。

1　生涯の日を正しく数える

聖書には神に導かれて信仰に生きた多くの人々の一生が描かれています。奴隷状態であったイスラエルの人々をエジプトから導き出した神の人モーセはその筆頭でしょう。彼の生涯は１２０年であったと聖書は伝えています。

そのモーセが詠んだと言われる詩が詩編９０です。その中で引っかかる言葉があります。１２節です。「生涯の日を正しく数えるように教えてください。知恵ある心をえることができますように」というもの。〝生涯の日を正しく数える〟とはどのような意味なのだろうか？」とずっとひっかかっていました。

生きる時も死ぬ時も神の時です。人間にはわかりません。ですから、モーセは、自分の地上での命の残りの日数を教えてください・・と言っているのでしょうか。それもあったかもしれない。でも、そのあとに「知恵ある心を得る事ができますように」と続きます。神の御心を知ることが知恵と呼ばれています。神の御心を知る力をお与えくださいとも読めます。ですから、単に残りの日数を教えてください・・というわけではないようです。生涯の日というのは神から与えられた命の日々。その日々を正しく数えるー正確に把握する・・という事は、神から与えられた使命を知ること、自分が何の為に生まれてきたのか知る事に通じるのではないでしょうか。

自分が何の為に生まれてきたのか知っている人はそんなに多くないように思います。自分の使命がわかっている人はなんと幸せな事でしょうか・・そんなふうに考えている時、ある聖書の登場人物が浮かんできました。それが今日のもう一つの聖書箇所、ルカによる福音書に登場する「シメオン」です。

シメオンは、聖霊から「主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない」と告げられていました。そして生まれたばかりの救い主イエスに出会い、その腕に抱くことができました。彼はこのように神を賛美します。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり　この僕を安らかに去らせてくださいます」

シメオンは、救い主を知った、だからもう死んでもよい・・とそう思ったのです。自分は何をする為に生まれてきたのか知り、その事を成し遂げた時、も

ういつこの地上を去ってもよい・・という思いになる、それこそ、「生涯の日を正しく数える」という事ではないでしょうか。

続くアンナも同じです。ここに神に祝福された人の歩みを見るように思います。今日はシメオンを通して、神に祝福された人の歩みを見ていきたいと思います。

2　命の定めの内に

場面は、イエスさまがお生まれになってから、四十日がたったエルサレム神殿です。２２節「彼らの清めの期間が過ぎた時」とありますのは、主イエスの母マリアの清めの期間です。男の子を出産した女性は四十日間は汚れたものとして神殿の出入りや聖なる物に触れたりすることが禁じられています。産後の女性が家に留まるようにと設けられた産休の制度だとも言われています。

「初めて生まれた男の子は、主の為に聖別される」という律法もありました。最初の子を主に捧げることを通してイスラエルの人々は、「子とその命は、親のものではない。主のものである」ときちんと認識する為なのです。その為に、小羊一頭、貧しければ鳩一つがいを生贄として捧げました。そうして子どもを主に捧げたうえで、自分の子として育ててよいことになるのです。

3　神の慰めを待つ人

その神殿には、シメオンという人物がいました。私たちの聖書では２５節で「その時」と訳されている言葉、直訳すれば「見よ、エルサレムのシメオンという名の男を」です。福音書記者ルカは、マリアとヨセフに抱かれている幼子イエスさまから、シメオンにフォーカスを移しています。彼は、「正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた」とあります。

「慰められる」―この言葉は、イザヤ書４０章で用いられています。神に対する背きの罪によって、長くバビロンに捕囚されていたイスラエルの人々に、神さまが預言者を送り、その預言者を通して民に語りかける言葉です。「慰めよ、私の民を慰めよと　あなたたちの神は言われる。エルサレムの心に語りかけ、彼女に呼びかけよ。苦役の時は今や満ち、彼女の咎は償われた、と。罪のすべてに倍する報いを主の御手から受けた、と。」

人の罪に対する神の裁きを超えて与えられる救いが、「慰め」という言葉に表されています。信仰深いシメオンは、そのように神の慰めを待ち望む人でありました。

4　イエスさまを抱くシメオン

その彼に聖霊が留まり、「主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、というお告げを受けていた」とあります。彼は、聖霊の導きによって神殿の境内にはいって行きます。一方、律法の規定どおりにいけにえを捧げようとして、イエスさまを連れてきたマリアとヨセフもまた神殿の境内の中へと入ります。

エルサレム神殿の境内―きっと多くの人間でごった返していたでしょう。お正月の神社の境内のようであったかもしれません。知り合いでも見つけるのは容易ではないでしょう。しかし、聖霊に導かれているシメオンは、ごった返す人ごみの中に親の腕に抱かれた救い主を見出します。そして、まっすぐに近寄っていき、マリアかヨセフの腕の中に抱かれていたイエスさまに手を差しのべました。

マリアもヨセフもシメオンとは初対面。おそらく老人であったシメオンの異常ともとれる行動に対して困惑しつつも、大切な子どもを差し出します。この行為は本来なら神殿の祭祀に対する行為です。しかし、一介の信徒であるシメオンがまっすぐに両親の所へと生き、その腕に抱かれている幼子を見て、手を差し出したのです。聖霊に導かれているからこそできた事です。そして、マリアとヨセフもまた、目には見えないけれども、聖霊に促されて、シメオンの手の中に幼子を渡すのです。

5　シメオンの賛美

救い主に会う為に年月を重ねたシメオン。彼は、幼子イエスさまを腕に抱いた時に、神をたたえてこう言います。

「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです」。

このシメオンの言葉の「主よ」と訳されている言葉は、ご主人、君主を意味する言葉です。「安らかに去らせてくださる」というのは、ご主人様の命令どおりに使命を果たして、その勤めから解放されることを意味するのです。シメオンに与えられた勤めとは、「主が遣わすメシアを見る」こと。その勤めが果たせた今、心安らかに去ることができる・・そのようにシメオンは言っています。

彼は幼子を見ました。そして彼は「私はこの目であなたの救いを見た」と言って賛美しています。まだイエスさまは何もしていない。生後４０日の赤ちゃんです。シメオンの腕の中で、力強い言葉を語るわけでもないし、癒しの御業をなされるわけでもありません。まして、十字架にかかり復活するわけでもありません。

しかし、聖霊が留まり、メシアを見るまでは死なない・・と言われたシメオンの目にはすべてが見えました。主イエスのこれから歩まれる道を見、力強い御言葉を聞き、癒しの御業に立ち会い、そして十字架のもとに立ち、朝の光の中、甦られた主イエスと出会ったのです。聖霊によって一瞬にして全てを知らされたシメオンは、自分の使命を果たす事ができた、だからもう死んでもよい・・と思ったのです。なんと幸せな人生でしょうか。

6　生きる事の虚しさ

シメオンのような生き方は、神を知らない人間には考えられない事です。神を知らないと、人の人生は砂時計のようです。残り時間は静かに落ちていく。止めることはできない、砂が落ちきれば自分という存在はどこにもいなくなる・・死んだらどうなるのか、実際は誰にも判らない。身がすくむ思いです。

確実に言えることは、この肉体は無くなって土に戻る、塵に戻る・・という事だけ。なんのために生まれてきたのかもわからず、死んだらどうなるか分からず、ただ肉体の死に向かっているだけ、それは、落ちる砂時計をただ漫然と眺めているだけの虚しいもの。生きる目的も死ぬ目的も分からないのですから。神がいない人生とは、基本的には虚しさに支配される人生と言ってよいのではないでしょうか。しかし、その虚しさは、人間の力ではどうする事もできません。だから、人は虚しさを忘れる為に、気を紛らわせる事を色々と探すのです。

ですが、年を重ねた時、肉体の自由が利かなくなった時、気を紛らわす事もできなくなった時、その虚しさはいかばかりでしょうか。命の意味が分からない、自分がどうして生まれてきたか分からないまま、砂時計だけが落ちていくー生きている実感の持てない命。正しく自分の死を覚える事ができない、神を知らないままに超高齢化を迎える現代日本の多くの高齢者の実感かもしれません。

7　キリストを見る

しかし、シメオンは、「あなたの救いを見た」のです。そしていつ死んでもいい・・と主を賛美し、次のように歌っています。「これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉です。」

私たち日本人は異邦人です。律法や預言者を通して神を知ったのではありません。イエス・キリストが神さまを示す「光」としてきてくださったので、神を知り、救いを知りました。見る事ができるようになったのです。暗闇の中ではないも見えません。生も見えないし、死も見えない。見えないから分からない。不安で仕方ないし、恐ろしい。だから紛らわし誤魔化し生きる。人生の日を正しく数える事ができないのです。しかし、私たちはごまかす必要はないのです。何故なら、「この目で救いを見た」から。キリストを見たから。だから、私たちは死を見る事もできるのです。そして、人生の日々を正しく数えることができるのです。

キリストを見る・・という言葉から、エマオの途上の出来事を思い出します。主イエスが十字架にかかって墓に葬られた日、弟子たちは主イエスを見捨てて逃げ去ります。三日後、女たちが葬りの準備の為に墓に行きますが、墓はからっぽで、天使から「主イエスは復活された」と聞きます。女たちは弟子たちに告げるのですが、弟子たちは誰も信じませんでした。その内の二人は、落胆して故郷のエマオに帰っていきます。しかし、その二人を主イエスが追いかけて共に歩いてくださり、語りかけてくださいます。でも、「二人の目は遮らていて、イエスだとはわからなかった」。

目の前にイエスさまがいらっしゃるのに、それがイエスさまだとは分からないのです。しかし、イエスさまはずっと旧約聖書の言葉を引用しつつ、「メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずであった」と語り続けてくださり、ついに弟子たちの家について食卓についた時、イエスさまが「パンを取り、賛美の祈りを唱えて、パンを割いてお渡しになった」・・その時、何が起こったか。

すると、二人の目が開け、イエスだとわかったが、その姿が見えなくなった。二人は、「道で話しておられる時、また聖書の説き明かしをしてくださった時、私たちの心は燃えていたではないか」と語り合った。（ルカ２４：３１－３２）

そして彼らはエルサレムに帰りました。死を恐れて逃げ惑っていた彼らが、福音を携えて全世界に派遣された使徒となったのです。死を恐れていた者が、死を恐れずに使命を果たす者に変えられました。

このような瞬間が私たちクリスチャンにもあります。聖書を読んでいて、「あぁ、この言葉は今の私にイエスさまが語りかけておられるようだ」と気づかされる瞬間。祈っている時に、主イエスが何を自分に望んでいるか与えられる時、主の十字架上のみ思いの一端が分かるような瞬間、私の命を生かす救い主イエス・キリストが確かに見える時があります。主イエスの語りかけが心に響く瞬間があるのです。聖霊によって心の目をあけて頂いた時、耳を開いて頂いた時、魂を照らして頂いた時です。そうして私たちはなすべき事を教えてもらえ、人生の日々を正しく数えることができるようにされるのです。

8　生きる事の意味

　そんな風に目を開かれ生きる意味を見出した女性の話しを紹介したいと思います。阪神淡路大震災でクリスチャンの母親をなくした女性です。震災当時、小学生であった彼女は兄弟とともに二階で寝ており、父と母は一階で寝ていました。自宅は震災で二階が一階を押しつぶす形で倒壊。寝室で寝ていた母親が押しつぶされてなくなったそうです。「自分の寝ていた二階が母を殺した」小学生であった彼女は深い心の傷を負うこととなります。母親を亡くした家族は教会の仲間に助けられ、子どもたちも教会の交わりの中で成長していきます。しかし、彼女は「どうして神さまは、こんな残酷な形で母を奪ったのか」その事が納得できず洗礼を受ける事ができませんでした。そして、助かった自分の命の意味を探していました。

　そんな時に、彼女は礼拝でイエス・キリストの十字架上での最後の言葉の取次を聞きました。主イエスの最後の叫び「我が神、我が神、なぜ私をお見捨てになったのか」「我が神、我が神、なぜ私をお見捨てになったのか」

　主イエス・キリストは、神の御子でありながらもっとも呪われた十字架の死をたったひとりで耐えました。愛した弟子達はみんな主イエスを見捨てて逃げました。

　父なる神と御子なる神イエス・キリストは一心同体。その一心同体である父なる神が、自分を見捨てた・・人間には想像できない徹底的な孤独の中で肉体の耐え難い痛みに、子なる神が苦しまれ絶望の叫び声をあげました。だけど、子なる神は我々人間のように、「私をこのように合わせた神よ、呪われろ」とは言わない。「神などあるものか」とも言わない。ただひたすらに、我が神、我が神・・と父なる神を求めて叫んだのです。人が降りる事のできないような深い深い淵の底から、なおも神を見上げて叫びました。

　さきほどの女性は、この御子の叫びを、教会の礼拝で聞いた時、主イエスのお姿が見えた。「父さん、父さん、どうしてこんなことが、どうしてなんだよ」と父親の胸をどんどんとうち叩く御子の姿が思い浮かんだそうです。そして、そのお姿が自分と重なった・・というのです。どうして自分の母が死んだのかは分からない。でも、「神さま、神さま、どうして、どうしてこんなことになったの、どうして、どうして」と嘆く彼女を十字架の主は分かってくださってい

た。そして彼女と共に苦しみ彼女と共に嘆いてくださっている。神の御子が私の嘆きに、痛みに、絶望に寄り添ってくださる。彼女はこの事に気づかされ、洗礼を受けました。

深い悲しみと憤りに目を遮られていた女性。しかし、その彼女に聖霊は働いてくださり、目を開かされ、十字架上で叫びをあげる主イエスのお姿を見せてくださった。その時、彼女は自分の命の意味を知りました。目が開かれイエス・キリストと出会う事―それは、一人一人が神を知る為に生かされ、神を知る為に死んでいくのだという事を私たちに教えてくれるのです。このシメオンのように。

9　死ぬ事の意味

週報にも書かせて頂きましたが、私の父が先週の水曜日１３日の深夜に亡くなりました。６年半に及ぶ闘病生活の果てでした。父はクリスチャンではなかったのですが、私が読む聖書を聴くのが好きでした。ローマ信徒への手紙５章がお気に入りでした。「私たちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を。希望は私たちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちに注がれているからです。」闘病の過程で気管切開をして喋る事ができなくなり、手の震えで長い筆談も難しくなっていた頃でした。衰えていく自分と向き合いながら、父は聖書の御言葉から励ましを受けていました。しかし、その後すぐに私は神学校に進む為、父のもとを離れました。イエスさまを父に伝えられなかった事が心残りでした。

姉と話しあい、身内だけでキリスト教式のお葬式で見送る事にしました。まんじりともせずに迎えた木曜日の朝、始発の新幹線に乗る為に横浜駅に向かう心は不安でいっぱいでした。「クリスチャンでない父さんの死にあたって、クリスチャンでない姉一家や妹に何を語ればいいのだろうか」と。その時、携帯にクリスチャンの親友から「お父様が主のみもとにやすらえるよう、夫と心を合わせて祈っています」というメールが入りました。そのメールを見て次の聖書の言葉が心へと浮かびました。「また、はっきり言っておくが、どんな願

い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心を一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。」“あぁ、主イエスが共にいてくださる”と感じました。

その瞬間、思ってもみない事ですが、父の声が頭の中に響いてきました。「洋子ぉ、お前の言っていた神さまは本当だったのぉ」という言葉でした。父は病院で誰に見守られる事もなく静かに息を引き取りました。だけど、私はこの時、確信しました。父は主イエスに導かれて死の陰の谷をとおり、神のみもとに帰っていった、父は最後の最後の最後にクリスチャンとなり、それを私に教えてくれた・・と。ですから、納棺式、前夜式、告別式、火葬前式・・全て父と共に行っているようで安心してつとめる事ができました。

姉一家はキリスト教が嫌いで、私が教会に通うのもよい顔をしませんでしたし、神学校に入学するのも反対していました。しかし、その姉が父の告別式をキリスト教式でする事を受け入れただけでなく、奏楽もつとめてくれました。姉や姉の夫、甥達は生まれて初めて聖書の説き明かしを聞き、讃美歌を歌いました。告別式での姉一家の姿を見て父の死の意味を思いました。「生きるにも死ぬにもキリストのため」―父はその意味を知らなかったかもしれない。しかし、私たち姉妹を愛しその命を育んでくれた。そして初穂として私が起こされ、父は最後の最後にキリストの言葉を残りの姉達に伝える為にその遺体を横たえている。父は意識していなかったでしょう。しかし、人間が意識しなくても、神は、父の生涯の最後の瞬間まで、その日々を確かなものとし、手の働きをみのりあるものにしてくださった。神の慈しみの深さに感謝しています。

10　救いを見た者として

私たちは救い主を知っています。だから、人生の様々な出来事の中にも、自分の命の生きる意味、死ぬ意味を見出す事ができます。私たちは神のみ前にその生涯の日々を正しく数える事ができ、手の働きを確かなものとする事ができます。深い主の憐れみゆえです。この神の慈しみに応えて私たちは何をすべきなのでしょうか。キリストを通じて示された神のみ恵みの深さ、高さ、広さを

多くの方々に宣べ伝える事に、私達の全てを、命と死を用いてくださいますように・・と神に切に祈ろうではありませんか。